

カトリック山形教会報

かすみ

7

2013.7.7



カトリック山形教会

〒990-0039 山形市香澄町2丁目11-15 TEL.023-622-3574 FAX.622-3590
ホームページ <http://www.catholic-yamagata.com/>



5月26日、塩釜地区のための祈り



5月29日、釜石地区のための祈り



最終日5月30日、福島県の被災地で苦しむ人々のための祈り

東日本大震災シスターズ・リレー 最終ランナー5日間の祈り

～想い続け・祈り合った5日間～

「シスターズ・リレー」。聞き慣れないことばではないでしょうか。東日本大震災後、全国の70以上の修道女会は、リレー形式でカリタス・ジャパンの各ベースに会員を派遣し、ボランティアベースで、様々な奉仕の役割を担ってきました。それがシスターズ・リレーの由来です。このリレーは、2012年の春で終了し、7月からは全国の修道会の「祈りでつなくシスターズ・リレー」が始まりました。この最終のバトンを渡されたオタワ愛徳修道女会日本管区は、5月26日から30日まで、最終ランナーとして、タイを含む各支部修道院で祈ったのです。

山形修道院では、一人ひとりが、カリタス・ジャパン被災地支援のプロジェクトや、ボランティアに参加し、関わりがあります。今回、一人ひとりが地域を分担して祈ることを決め、教会にてお誘いしました。5日間同じ意向で祈り続けることは、私たちに、被災地をさらに意識させ、心を寄せることにつながったと感じています。

祈りは下記の通りに計画されました。

1日目の26日。塩釜地区の被災者の復興の歩みと心を合わせて桂島の区長さんのことばを読み、沈黙のうちにご聖体の前で祈りを。

2日目の27日は米川ベースの活動が、被災者たちの復興の道のりに寄り添うものとなるように願ってみことばを祈り、聖体礼拝。

3日目の28日は、石巻ベースの歩みと心を合わせて、被災

された石巻地区の被災者の復興を願って、ボランティアの体験がもたらすものを意識しつつ祈る。

4日目の29日。姉妹が釜石でのボランティアの体験を分かち合い、その後釜石地区の被災者と復興のために支援している活動を支えている人々のために聖体の前で祈り。最終日の5日目の30日は、福島県の方々のために祈りました。原発事故で家、土地から避難している人々、不安を抱えてそこで生活している人々が、安心して、希望をもって暮らせる日が来ることを切に願い、復興支援の活動をしている人々と心を合わせて聖体礼拝を捧げました。

聖堂には、カリタス・ジャパンから出されているカリタスベースのポスターを展示し、「希望の灯り」としてろうそくを灯し続けました。

勤務を終えてからの遅い時間でしたが、信徒の方々と共に集い、東日本大震災で苦しみながら、復興へ向かって生きている人々に心を寄せて毎日祈る中で、共同体としての祈りが時間、空間を越えて、確かに被災地の誰かのもとに届いているという確かさを感じていました。

被災地復興への道のりは、まだまだ道半ばです。「東日本大震災被災者の祈り」を日々唱えながら、そこで生活している方々に思いを寄せ祈ること、できる支援をしていくことの呼びかけを受け止めた5日間でした。

(オタワ愛徳修道女会 Sr.木田まゆみ)

第27回「みこころ祭」開催



6月の第1日曜日は、特別養護老人ホームみこころの園で「みこころ祭」が行われます。「みこころ祭」はみこころの園後援会が主催し、祭りの収益金をみこころの園へ寄付金として援助させていただいております。

今年は6月2日に開催され、回を重ねて第27回を迎えることができました。たいへんうれしく思っております。

みこころの園をご利用されている皆さまと、楽しい一日をつくるため、そして、ご家族、地域の皆さまと楽しい祭りをつくりあげ、カトリック教会ボランティア18名、学生ボランティ

ア35名他とともに、今年の祭りのテーマ「手から手へつなぐ想い」のもと開催され、ご利用者さまとともに祭りの喜びを分かち合い、楽しい一日を過ごすことができました。教会からは、たくさんの方が来客として足を運んで下さり、祭りの華やかさに一役かっただけでした。ありがとうございます。

この式典を挙げるに当たり、野口施設長はじめ「みこころ祭」実行委員の方々へ感謝申し上げます。

(みこころの園後援会会長 大宮正美)

“賛美と感謝の集い”カトリック新庄教会 (山口亮二氏 — 水野源三さんをうたう)

5月5日、久しぶりの快晴だが、ちょっと肌寒い風の朝、私達のマイクロバスは、カトリック新庄教会をめざし山形を出発しました。新庄教会でのミサへの参加、山口亮二氏のコンサートを聞き、新庄教会の信者さん達と一緒に花見をするためです。澄みきった空に“春”特有の暖かい日差しを受けながら、山頂に残雪を残した堂々たる葉山、遠くにポツカリと頭を出した真っ白な月山、また一面の田んぼは、田植え前のひとときをゆったり楽しむかのよう!昔どこかで見たことがあるような“のんびり”とした風景を楽しみながら新庄に到着しました。日陰にはまだ黒く汚れた雪が多く残っており、途中の“春の日和”と比べ長い冬の厳しさを感じられました。しかし新庄教会の信者さん達は、今日の日を心待ちにしていたかのよう、元氣よく忙しく準備されていました。

米沢教会、鶴岡教会の信者さん達も見えられ約60人、全員でのミサ、そして終了後に山口亮二さんのコンサートが始まりました。

最初にDVDを使用した水野源三さんの紹介です。9歳の時に脳性麻痺により、目と耳以外の機能を失い自暴自棄になったこと、五十音を目の動きで表し、母親がそれを一字ずつ記帳し会話する方法を得たこと、母親がおいた聖書からクリスチャンに。そして18歳の時から詩作をはじめ47歳で亡くなるまで多くの詩集を残したこと。今日歌われる中の3曲を紹介します。自然のなかでの、神への賛美と感謝です。

○くるしまなかつたら(神様との出会い)

もしも私が苦しなかつたら
神様の愛を 知らなかつたら

もしも多くの兄弟姉妹が 苦しなかつたら
神様の愛は 伝えられなかつたら

もしも主なるイエス様が 苦しなかつたら
神様の愛は現れなかつたら

○露草(母親の愛を詩に)

露草の花は 瞳に映った空 その明るさは 母

露草の花は こぼれ落ちた涙だ そのやさしさは 母

誰も通らない 路地にそっと咲いた
露草の花は 母も好きだった



○主よ来たりたまえ(日頃の何気ないなかで、思いがけない時がきても受け入れられるように)

主よ来たりたまえ 主よ来たりたまえ
リンゴの白い花 吹く風に散る朝
カッコウが静かな 林で鳴く朝に
思いがけない時 来られてもよいように
主をお迎えする 備えをさせたまえ

主よ来たりたまえ 主よ来たりたまえ
澄みわたった空に もみじうるわしい朝
竹の葉につもった 雪が光る朝
思いがけない時 来られてもよいように
主にお会いする 備えをさせたまえ

これらの詩を素朴で美しいメロディーに、そして源三さんと一体になり、1曲1曲その想いを解説しながら歌い上げてくださいました山口さん。神秘的静寂の中、私達は取り込まれたように聞きながら、いつのまにか、神の愛、神への賛美と感謝を黙想させていただきました。

皆さんも一度聞いて下さい。終了した時は何とも言えない感謝の時間が聖堂に満ちていました。

山口さんは本間神父様の友人です。現在、那須に住んでおられ、カトリックの養護老人ホームの施設長さんをしておられます。ギターを主にしたフォーク調のメロディー、そして歌声の素晴らしさはなんとも云いあらわせません。

その後、新庄教会で準備してくれたカレーや飲み物を頂きながらひと時の歓談交換会。帰り道では、山形教会恒例の“道の駅”での買い物。今回は村山の道の駅でしたが、皆さんそれぞれが、お土産など目的のものを買われ本当に楽しい有意義な一日でした。

今日の良き日を準備してくれた新庄教会の皆さんに感謝します。
(2013・5・5 柴田 博)

十 祈りの小部屋



写真と文章は関係ありません。

『キリストを悟った女』

あるとき、一人のキリスト者の男が、キリストの証人になろうと思い、インドからチベットに向かいました。徒歩でヒマラヤをこえるルートで、過酷極まりない宣教旅行でした。男はもう何度も同じようにしてチベットを訪れていました。ですが、ついに今回、その男は帰ってきませんでした。凍死したのか、他宗教の信者に殺されたのか、わかりませんでした。数十年後、旅行者で、信仰を失いかけていた一人の女が、その男の持ち物を、奇跡的に見る機会に恵まれました。男が生前世話になっていた家の者が、男の大切な思い出として丁寧に保管していたのです。男は聖人のほまれ高く、その生き方により多くの人に好かれていました。女は、男が持っていた聖書やノートなどを手に取りました。そこには、たくさんの書き込みがありました。ですが女には、帰りの飛行機の時間が迫っていました。女は「この中の言葉の一つだけでも、何と書いてあるか知りたい」と切望しました。通訳が、かろうじてたった一言だけ、聖書への書き込みから訳してくれました。女はその言葉を手にし、飛行機に飛び乗りました。飛行機の中で女は、その言葉が書かれたメモを開きました。『キリストはわたしのもの。わたしはキリストのもの』男の魂から出た、熱烈な、火の吹き出るような信仰告白でした。その言葉に、女は非常に心動かされ、何度も読み返しました。ついには、小さく声を出して、言ってみました。「キリストはわたしのもの…… わたしはキリストのもの……」すると、男の、過酷な宣教を支えていた力の源、キリストの現存を、いま自分の胸の中に、確かな炎として感じました。女は胸に手をあてました。「キリスト。あなたはわたしのもの。わたしはあなたのもの」女の目に涙が浮かびました。

『祈りを知った神父』

ある神父が入院中の男を訪ねました。寝たきりの男と話をするために、ベッドのそばの椅子に腰かけようとしたところ「神父さま。その椅子はだめなのです。その椅子には座らないでください」と言われました。男は言いました。「その椅子は… イエス専用なのです。わたしはいつも話しています。目の前のこの椅子に、イエスが座っていると想像して、心に浮かんでくることをなんでも、イエスに打ち明けているのです。悲しみや怒り、罪悪感、喜びや楽しさ、平安など、今どんな気持ちか、話しています。隠しておきたいことほど、勇気を出して話します。すると、イエスはちゃんと聞いてくださり、心がとても安らぐのです」

神父は男と会話し、病室を後にしました。何週間か経って、神父の部屋の電話が鳴りました。電話を取ると、入院していた男の娘から「今朝父が亡くなりました」と聞かされました。男は余命いくばくもない病気だったのでした。「それが、不思議なのです」男の娘が続けました。「父の頭は、枕にはありませんでした。父の頭はベッドのそばの、椅子にもたれかかっていた」それを聞いた神父は男の最後の祈りがどのようなものであったか悟りました。そのとき、静かな感動が神父の胸を訪れ、神父の目に涙が浮かびました。

『列車に乗った神父』

ある神父は、自分の横にイエスがいると常に想像して、イエスと一緒に行動していました。列車の切符を二枚買ったところで、神父はハッと気が付きました。「そうだった。あなたは切符がなくても、列車に乗れるのだった」神父は自分の失敗が、これ以外にもたくさんあるのを思い出しました。「わたしはダメな人間だ。神父にふさわしくない」神父は肩を落とし、大きなため息をつきました。するとイエスが神父に向かってニコッとやさしく微笑みました。イエスのやさしい態度を見て、神父はホッとしました。「そうだ。あなたは受け取ってくださる。わたしの悲しみも、苦しみも、すべて…… たった一羽のすずめすら、あなたの知らぬまに地に落ちることはない。なら、わたしの悲しみも、苦しみも、きっと価値あるもの。決して無駄ではない。あなたはわたしを、わかってくくださる。あなたはわたしを、受け入れてくださっている」神父の目に涙が浮かびました。「不思議です。主よ。もう悲しくない。わたしの胸に今、喜びがあります。あなたに捧げます。わたしのすべてを受け取ってほしいのです。人生の成功と失敗のすべてを。わたしの人生の、喜びと悲しみのすべてを受け取ってほしいのです。あなたはわたしに、すべてを捧げてくださいました…… わたしはとっても嬉しかったです。ですから、今日、わたしもあなたに、わたしのすべてをお捧げいたします。どうか、ずっと、わたしと一緒にいてください。もうそれ以外、ほしいものは、何もなくなってしまうました。イエスよ。愛しています」イエスは神父をやさしくぎゅっと抱きしめ、神父も泣きながらイエスを抱きしめ、二人は一つの列車に乗り込みました。

(広報部/中村 遼)